

2-P-11

わきた歯科医院における「神奈川県平成28年度オーラルフレイル実態調査」対象者の現状調査

- 1) (一社)海老名市歯科医師会
- 2) わきた歯科医院
- 3) 海老名総合病院歯科口腔外科
- 4) 日本大学松戸歯学部歯科麻酔学講座

○脇田 雅文^{1,2)}, 石井 良昌^{1,3)}, 盛田 健司¹⁾, 鈴木 仙一¹⁾
山口 秀紀⁴⁾, 鈴木 正敏⁴⁾, 渋谷 鑛⁴⁾

【緒言】日本歯科医師会はオーラルフレイルをスローガンに掲げ、平成30年度診療報酬改訂において口腔機能低下症の病名が新規導入された。それに先立ち神奈川県では平成28年度に65歳以上の3297名の「オーラルフレイル実態調査(以下「実態調査」)」が行われ、当院も本実態調査に参加した。今回われわれは実態調査対象者の現状および従来の口腔衛生継続管理のリコール率との比較について検討したので報告する。

【対象および方法】実態調査の対象者は、平成29年1月～3月に65歳以上のわきた歯科医院を受診した口腔衛生継続管理で通院している患者で、調査協力の得られた計20名(男10名女10名)、平均年齢72.45歳(65～80歳)、BMI 23.4であった。オーラルフレイルの判定は、①咀嚼困難感の自覚の有無、②水分嚥下時のむせの有無、③オーラルディアドコキネシス「タ」6回/秒未満、④ガム咀嚼テストスコア3以下、⑤現在歯数20歯未満、の5項目のうち3項目以上を該当者とした。実態調査対象者は調査終了後の通常の定期検診時に、従来の口腔衛生継続管理のみではなく口腔機能低下予防のための指導を加えた。

【結果】オーラルフレイル判定では、0項目該当者は20名中7名、1項目7名、2項目4名、3項目(オーラルフレイル該当)1名であった。当院の特徴として⑤20歯未満は12名と多いが、19名がインプラント治療により機能回復がされており、咀嚼ガムでは19名がカラーコード4点以上であった。またリコール率は、調査時期に従来型定期検診に通院していた387名のうち261名(受診率67.4%)、対象者では20名のうち19名(95%)と高かった。

【考察】今回定期検診で口腔機能低下予防のための指導を行ったことは、リコール率アップにつながり患者教育の上でも有効であった。今後は海老名市で平成31年から開始した「オーラルフレイル健診」を通じてより多くのデータを蓄積させ健康寿命延伸に貢献していきたい。

2-P-12

当院訪問診療における認知症患者の口腔状況および歯科治療時の対応について

神奈川県歯科大学大学院歯学研究科全身管理医歯学講座全身管理高齢者歯科学分野

○飯田 貴俊, 林 恵美, 田中 洋平, 杉山俊太郎
西崎 仁美, 辰野 雄一, 森本 佳成

【緒言】認知症は重症度によっては口腔管理に支障をきたすため、歯科領域において重要な疾患である。今回認知症重症度による口腔内状況および対応の変化を明らかにするため調査をおこなったので症例を交えて報告する。

【方法】2019年3月～12月に某介護老人保健施設への訪問診療で初診にて診療をおこなった認知症患者10名(男性5名、女性5名、平均年齢88±4歳)を対象に、MMSE、DMFT、認知症の種類、既往歴、BMI、依頼内容、治療内容等について調査した。MMSEによる認知症重症度判定としては、0-10点を重度、11-20点を中等度、21点以上を軽度として分類した。本研究は神奈川県歯科大学倫理委員会の承認を受けている(559番)。

【結果】重度-中等度-軽度の比較で、未処置歯数は0-2-15、欠損歯数は21-17-19、BMIは18.9-20.7-19.0(中央値、いずれも有意差なし)であった。依頼内容は軽度～中等度では義歯調整が多く、重度では口腔ケアの依頼が多くなった。中等度以上では義歯の再咬合採得やグラスアイオノマー修復などの歯科治療の経過が見られた。

【症例】74歳女性、アルツハイマー型認知症。主訴は「口から食べさせたい」という家族からの依頼。胃瘻にて栄養管理中。指示動作困難。初診時はスプーンを口に近づけても反応がなかった。開口を促す際はジェスチャーのみでは開口せず、開口器具を用いた強制開口が必要だった。2か月後、訓練継続によりスプーン介助でゼリー食の摂取が可能となった。開口はジェスチャーのみで行える事が増え、施設スタッフによる口腔ケアでもある程度清掃可能となった。

【考察】重度認知症であっても継続的指導や環境調整等の対応により行動変容し、口腔管理を維持できる場合がある。認知機能低下は歯科診療に影響を及ぼすが、未だ具体的な対応法は確立されていないため、今後さらなる調査が期待される。